湖上の砦

逢坂十七年蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
湖上の砦

【Ｎコード】
Ｎ３４１１Ｙ

【作者名】
逢坂十七年蝉

【あらすじ】
湖上の砦がゴブリンに襲われた。守るは梟雄＞破城槌＜ユーグの娘婿である。複雑な想いを胸に秘め、老将ユーグは救援に馬を走らせる。

1

宵闇の森を十数騎が疾駆していた。
冷たい風は容赦なく一向に霙混(みぞれ)じりの雨を叩きつけるが、怯む様子はない。
冬の広葉樹林を縫うように走る街道を北へ北へと進む。
馬上の男たちはいずれも軽装だ。
所持品は僅かに長剣と弓、それと背嚢(はいのう)に三食分の糧食のみ。
鎧櫃(よろいびつ)さえ後続に託し、集団の頭である老将ユーグ・ダナンには急ぐ理由がある。

「……厄介なことになった」

同行の部下に聞かれぬように口の中で同じ文句を転がす。
白い物の混じり始めた濃い茶の髪に、老いたりと言え精悍な顔つき。
＞破城槌＜のユーグ、と言えば近隣に知らぬ者の無い梟雄(きょうゆう)だ。

素性定かならぬ傭兵から身を起こし、胡乱な男爵夫人の寝室に潜り込んで誑し込んだ男は今では付近に九も十も荘園を取り纏める貴族さまだった。
戦も滅法(めっぽう)巧い。
麾下の傭兵隊を率いて転戦を重ね、＞破城槌＜の仇名も伊達や酔狂ではなかった。
分捕った領地に勝手に“アナン男爵領”と名前を付け、自身はアナン男爵を自称して早三十年。
今や王国の君侯諸賢からも一目を置かれる男は、沈着冷静を常とする。
そのユーグが焦りを隠そうともしないのは珍しいことだ。

苛立ちから零れそうになる罵りを鍛えた自制心で抑えつけ、ユーグは馬に拍車を入れる。
小鬼共(ゴブリン)に領内の城が襲われていた。
それも娘婿の城が、だ。

人間は冬の間に戦争などしない。骨折り損だということを知り抜いているからだ。
泥濘(ぬかる)み、或いは凍結した糧道は維持が難しく、騎馬も荷駄も簡単に腹を下す。
馬がいなければ人様の糧食も運べるはずもない。となれば自然と戦意は衰えるものだった。
だが、道理を弁えない小鬼共(ゴブリン)は夏でも冬でも食い扶持が無くなれば氏族単位で南下してくる。厄介極まりないのだが、根絶するほどの軍を発することは王と言えども難しい。
なればこうして山から降りて来たところを一々追い払うしかないのだが、今回は場所が悪かった。
小鬼共(ゴブリン)のが囲んでいるのは、ユーグの娘婿の暮らす城なのだ。
娘は、そこにいない。
今はそれがせめてもの救いだ。
ユーグの命で若夫婦は別居の憂き目を見ているのだった。

「――厄介なことになった」

ユーグは繰り事のように呟く。
実を言えば、娘婿には死んで貰った方が有り難いのだ。
仮にも義理の息子に“死んで貰いたい”というのも剣呑な話だったが、故無きことではない。
全ては梟雄ユーグの野望の為である。
だが、今ここでというのはいささか拙かった。

元々が政略結婚だった。
身代金代わりに分捕った飛び地を纏める為に、娘婿のジャン＝ジャックの父が持っていた領地はとても魅力的だったのだ。僧籍に在ったジャン＝ジャックを無理矢理還俗させて自分の一粒種である娘のアンヌ＝マリーを宛がった。
話は上手い具合に転がり、あっという間に回廊状の領地はユーグの手に落ちた。

元々学僧だったということもあり、この義理の息子は物覚えが良い。
初めこそ後継者として仕込む心積もりであったユーグだが、次第に期待は諦念に置き換えられた。
所詮は坊主、ユーグの先進的な戦術を理解はしても体得は出来ないだろうと早々に見切りを付けた。

ならば気になるのは自分の次代だ。
手札の娘は一人きりとなれば、もっと有望な男を婿に取らねば道理に合わない。
幸いなことに＞破城槌＜ユーグ・ダナンと縁続きになりたいと願う貴族には事欠かなかった。
邪魔な娘婿さえ排除すれば未亡人となった娘に新しい婿を取ることが出来る。
但し、謀殺は出来ない。
ただでさえ悪評高いユーグにとって、これ以上の不穏な噂を付け加えるのは得策ではなかった。

だからこその強行軍だ。
義理の息子を見殺しにする不実な義父、という評は耐え難い。
近在の郷士に非常の呼集を触れながら、ユーグの動きはまさに電

光石火だ。
手元に置いてあった古参兵を十数騎伴ってここまで来たが、もちろんこの数では物の役には立たない。が、今のユーグに必要なのは小鬼(ゴブリン)相手の戦勝よりも篤実家という声望だ。
押っ取り刀で駆けつけて、まずは小当たりに様子を見る。
親子の情に篤い義父となれば、侯爵とは言わぬまでも伯爵の三男坊くらいは釣れるかもしれない。
それ故に、娘婿には“死んで貰わなければならない”が“早く死んで貰っても困る”のだ。

老将は腹立ち紛れに拍車を入れる。鬱蒼と茂る樹々が徐々に疎らになって来た。
いつの間にか雨は止んでいる。
娘婿の立て籠もる湖上の砦は、もう間もなくの距離だ。
見えた。
森の切れ間から眼下に見える砦は、予想外なことに未だ持ち堪えている。
囲む小鬼(ゴブリン)は、一〇〇〇から一三〇〇。
戦下手と思っていた娘婿が耐え抜いているのは、ユーグにとっては不思議なことでさえあった。

〇

湖上の砦は縁起を辿ればこの区域一体を管掌する司教の館だ。
教区の統廃合で廃城となっていたものをユーグが若い娘夫婦の為に買い与えたものだった。
僻地に暮らすとなれば若い二人だけともいかない。
召使い、その家族、護衛が集えばそれに物を売りつける商人も集住し、最早それは一個の村だ。
本格的な城壁こそ持たないものの、百を超える人々が集えばジャ

ン＝ジャックの人柄もあって日々発展し、今では街道のちょっとした休憩所と言う有様となっている。

元学僧と言うだけあって娘婿はこの信仰の庭だった建物を甚く気に入ったようで、彫刻家が大理石に向き合う熱意で丹精している。北に向けて豊富な水量を湛える湖の南岸にへばり付くように浮かぶ小島を完全に覆うように築かれた砦は、増築に改築を重ねて今では立派な天守閣を備える城砦の風格だ。

小島の対岸、つまりは湖岸の小さな村を小鬼（ゴブリン）たちは包囲するように陣を敷いていた。

ユーグは驚きを禁じ得ない。

思いも寄らぬ義理の息子の敢闘に、である。

見れば、工夫が凝らされているのは小島の城砦だけではない。

城攻めの名手の目を通して見て、実に小憎たらしいのは村の縄張りだ。

村を囲むように外に背を向けて輪形に建てられた家々は外壁を連ねて城壁の代わりを成している。

この規模の村には多過ぎる櫓は矢を射掛ける塔を代替し、一箇所しかない門には鉄の閂まで用意してある始末だ。

（これはつまり、儂と事を構えることを考えていたか）

頭は悪くないジャン＝ジャックのことだ。

妻と別居させられた時点で敏感に何かを感じ取ったに違いない。

となれば異常に豊富な矢玉にも得心がいく。

夜でも湖の漣（さざなみ）の如く押し寄せる小鬼（ゴブリン）の群れに射掛ける弓手に躊躇いはない。

それは堅陣だった。

村の中央では篝火が焚かれ、戦意も高い。
後背に滔々(とうとう)たる湖を背負っては水の手に心配もなかった。
冬支度に糧食も蓄えているとあればこれはもう難攻不落と言っても言い過ぎではない。

であればこそ、ユーグには残念でならなかった。
＞破城槌＜の名を冠する老将でなければ見抜けない綻びが、この守りにはある。
言わば、繕い切れない綻びだ。隙、と言い換えても良い。
そこを突かれてしまえば、脆い。
このまま包囲が続けば如何に小鬼(ゴブリン)共と言えどもいずれは気付くはずだ。

（それまでに）

兵が到着すればいいが。
ユーグの麾下の兵団が到着すれば、逆に包囲してのけることも可能だ。
各地を転戦して場数を踏んだユーグの軍は精強さで知られる。
あれほど頭を悩ましていた謀略も何処へやら、老将はいつの間にかこの戦いを愉しみ始めていた。

2

ジャン＝ジャックは小刻みに震える手に白い息を吐きかけた。
何も寒さからだけではない。
痩身のこの還俗（げんぞく）僧は、正真正銘の臆病者だった。
今も鎖帷子の下で身体が震えるのを貧乏揺すりの振りで誤魔化している。
その一方で、妙に達観してもいた。
村を取り巻く戦況を、恐ろしく冷静に見つめている。
敵の数。自軍の数、配置。
全て把握して、算法にも明るいこの男の脳髄にはまだ余裕がある。

目の前には巨大な篝火が焚かれていた。
元々は新年を祝う火祭りの為に支度しておいたのだが、思わぬ処で役に立つものだ。
村の女たちは湖上の砦に下がらせ、ジャン＝ジャックは此岸の村に残って震えながら指揮を執っていた。
周囲を固めるのは村の男たち、と言ってもただの平民ばかりではない。
ジャン＝ジャックは財布の許す限り、傭兵崩れや元兵隊をこの村に受け容れていた。
戦慣れした男たちは自分のすべき仕事をてきぱきとこなす。
それはまるで正規軍のようですらあった。

顔に掛かる火の粉を払おうともせず、ジャン＝ジャックは小高い森を見つめている。
闇に慣れぬ目ではよく見えないが、義父の援軍を無意識に探しているのだ。
いや、援軍が来ないことを確かめていると言った方が正しい。

この世とあの世の狭間に漂う謀略が凝り固まって人の形を取ったよう義父のことだ。この機に妻のアンヌ＝マリーに取らせる新しい婿のことを算段しているかもしれなかった。

そんな義父のことが、ジャン＝ジャックは堪らなく憎い。

勝手に跡継ぎと見込み、勝手に諦める。

傍若無人とはこのことだった。

信仰の道すら取り上げられて、今度は最愛の妻まで奪おうという算段か。

小鬼（ゴブリン）と手を組むほど人間を捨ててはいないとは思ったが、それも希望的な観測だ。

可能であればどんな汚い手でも使うのがユーグ・ダナンという男だった。

だが、そんなことは最早どうでもいい。

ここで死ぬことになってもジャン＝ジャック・ダナンは一向に構わないと思っている。

たった一つだけ、心残りがあるとすれば。

「ジャン＝ジャックの殿様、ゴブリンの第四波攻撃は終わったようです」

「うむ、御苦労。第三班は休息。第一班と交代しろ」

「御意」

あの老人を迎え撃つ為に練り上げたこの砦を見せつけることなく死ぬかもしれない、ということだ。

○

ジャン＝ジャックの実家は、恐らく何かに呪われている。
上の兄二人は流行病（はやり）でさっさと亡くなり、両親もジャン＝ジャックの結婚が決まると早々に片付いた（もっともこの二人の死についてジャン＝ジャックはユーグ・ダナンの関与を疑っている）。
還俗するまでは王都の大学で教会法を専攻していたジャン＝ジャックはその道で立派に飯の種を稼げるだけの頭角を現していた。そこにこの結婚である。
信仰の道を諦めるのは辛かったが、運命を天与の物として受け容れるジャン＝ジャックは貞淑な妻アンヌ＝マリーを心の底から愛した。
素性と評判はともかく戦巧者（いくさこうしゃ）と名高いユーグ・ダナンの跡継ぎと見込まれては、慣れない軍の作法や兵法も必死に学んだ。

根が真面目なジャン＝ジャックに、ユーグは自身の分身となるべく様々なことを教育した。
城の攻め方は言うに及ばず、陣割り、野戦の駆け引き、撤退の心得、権謀術策、城の縄張り、天候の読み方に果ては周辺諸侯の弱みまで伝えて、ある日突然、ジャン＝ジャックを突き離したのだ。
恐らく、飽きたのだろうとジャン＝ジャックは見ている。
正規の教育を受けていないユーグの教え方は支離滅裂で、聞く方も難儀だが教える方も精力を使う。
野盗相手の実戦しかこなしていないジャン＝ジャックがどこまで己の教育成果を身につけているかも確認しないままに、ユーグの目は次の婿候補に向けられていた。

それが、ジャン＝ジャックの心を深く深くえぐる。
これまでの人生でおよそ学ぶことについては挫折を知らぬ秀才に、義父の仕打ちは余りに非常に映った。誉められることすらあれ、叱られることも貶されることも不慣れなジャン＝ジャックに、“見放された”という事実はあまりに大きく、深刻な問題だった。

ならば。
歪んだ愛情は歪んだ憎悪に変わり、歪な自己承認欲求は篤実そのものの男を復讐鬼へと変える。
愛する妻と引き離されたことよりも、義父が自分を無視したことに対してジャン＝ジャックは憤怒の情を抱いていた。
あの義父の最も得意とする分野で、義父に一泡吹かせる。
それが今の彼にとっての唯一無二の生きる望みだった。

学究の徒を志していただけあり、ジャン＝ジャックの頭脳は明晰な部類に入る。
性格は基礎を重んじる性質で、愚直とも言える性格の持ち主だ。
こうした人間が、全力を持って砦を造る。
それはまるで一個の芸術作品のようであった。
ただの寒村に偽装して、その実この村は難攻不落の城砦だ。
後二年あれば、出城も含めて完全に機能するはずだったのだが。

義父のご機嫌伺いに訪れる度に聞かされる自慢話は、この要塞の随所に活かされている。
どんな城を落したかよりも、どんな城に苦戦したか。
旧友との手紙をやり取りしながら、旅の托鉢僧に旧跡に足を運ばせてジャン＝ジャックの熱意は尋常なそれではない。
自ら図面を引き、大工の棟梁に並んで現場を監督する。
酒手を弾んでも、手抜きは決して許さない。

なにせチェス盤の向かいに座るのは、名うての＞破城槌＜だ。
並大抵の城では一捻り。
目指すのは難攻不落のみ。
しかもこの叛乱の準備を気取られてさえいけないとなれば、病的な集中力を要する作業だ。

女々しい男の箱庭いじりと義父に嘲られながら、ジャン＝ジャックはこの要塞を造り上げていった。
その成果を見せるのが義父ではなく、単なる小鬼（ゴブリン）だというのが無性に腹立たしい。

（さて、どうなるかな）

負けるつもりは、無い。
たった三〇〇の立て籠もる城で、ジャン＝ジャックは四倍する獰猛な小鬼（ゴブリン）を受け止める積りだった。
勝算がないわけではない。
亜人などと蔑称される小鬼（こおに）にも考える頭くらいは備わっている。
この城を攻めても旨味がないと気付けば、別の場所に不幸な羊を探しにいくだろう。
ならばそれまで持ち堪えれば良い。
ここはその為に造られた場所であり、ジャン＝ジャックはそれに備えて来たのだから。
ざっと一割。多くて、二割。
それだけの戦力を喪失すれば、小鬼（ゴブリン）は引き上げるはずだ。

なるべく速く決着を付けるべきだった。
余力を残さないと、“本番”に差し障る。
小鬼（ゴブリン）の襲撃を独力で退けたとなれば、ユーグのことだ、必ずこの砦の秘密に気付く。
そうなった時に悔いの残らない戦いをする為には、前座には早々にご退場願わねばならなかった。

で、あれば。
森から目を離し、手元の地図に視線を落す。
そこに描かれているのは詳細な村の地図だ。

自身が丹精込めて創り上げた村は、何も外壁が頑丈なだけではない。

（もし義父（オヤジ）殿なら、どう出るこの一手）

脇を抜けて持ち場に向かう第一班一〇〇名に、予め伝えてある手信号を送る。

仕掛けられた罠の口を開く合図だ。

訓練を積んだ手勢の動きは大したものだった。

そのままユーグの軍に編入されてもやって行けるだろう。

＞破城槌＜の義理の息子は元僧職とも思えぬ残忍な笑みを口元に浮かべた。

見る人が見れば、猛禽を思わせるその笑みは義父にそっくりだと証言するだろう。

ジャン＝ジャックは、自分がこの状況を愉しんでいることにまだ気付いていない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3411y/

湖上の砦

2011年11月8日05時22分発行